



Title	三味線に関するプロダクトデザインからの考察：人と道具との新たな関係の構築を目指して：「Karakuri Shamisen」のデザイン制作
Author(s)	村井, 陽平
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 104-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71207
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

三味線に関するプロダクトデザインからの考察

— 人と道具との新たな関係の構築を目指して — 「Karakuri Shamisen」のデザイン制作

村井陽平 京都市立芸術大学大学院博士後期課程

1. はじめに

本研究は筆者が博士課程の研究を進める中で制作した作品の一部を抜粋し、パネル発表を行ったものである。近年の音楽教育の変化により日本の伝統音楽は停滞し、江戸時代に大衆楽器として栄えた三味線の需要は減少の一途を辿る。ユーザー層の縮小は職人の減少に直結し、三味線の年間平均制作台数としても5台を下回り、三味線工房も廃業に追い込まれてきている。今後の継続が危ぶまれる状況の中で、筆者は東京都中小企業振興公社が主催したプロジェクトより、三味線工房「三絃司きくおか」を主宰する、三味線職人の河野公昭氏と共に三味線のデザインを試みた。

2. 三味線の携帯性

現代の三味線は、「棹」を三分割にして持ち運ぶことが出来る三つ折の三味線が大半である。しかし、職人の手仕事だからこそ成せる角の立った緊張感のある形状は、繊細で美しい一方大変欠けやすい。この為、三味線を厳重に保護する為の収納ケースは大きく、持ち運べる工夫が成された楽器でありながら、持ち運ぶことが煩わしい楽器であると奏者は口を揃える。三味線の購入場所としては、インターネット通販や和楽器店での購入、三味線工房からの直接購入などのルートが一般的であるが、和楽器店や三味線工房を見かける機会は珍しい。また、様々な国の楽器を取り扱う楽器店に関しても、三味線を取り扱っていることは稀である。その要因としては、在庫のスペースを要してしまい、猫皮や犬皮といった希少な天然皮革が張られた音響膜は、

時間の経過の中で破れることから取扱いを難しくさせている。

3. 過去の職人技

過去の職人技の中には、持ち運びの利便性を高めた十折の三味線がある(図1)。これは、棹を十分割できるようになっており、細かく分割した棹は全て「胴」の中に収納し、コンパクトに持ち運ぶ事が出来る。



図1 十折の三味線

しかし、分割数を増やすと三味線の棹同士を繋ぐジョイント機構「ホゾ」の発生回数が増えてしまい、職人技で精度が求められる部位が多くなるに連れ、制作時間を要し楽器の値段を高く設定せざるを得ない。また、胴の中でパーツ同士が干渉した際、ホゾが折れないように「仮継ぎ」が作られ、これに関しても制作時間を要してしまう(図2)。これらの事から三味線職人の河野氏は、現代で十折三味線の制作依頼を受けた際には、最低でも60万円以上は必要であり、まずこの値段で三味線が売れる時代ではないと話す。コンパクトに持ち運ぶことができる工夫には大変目を見

張るものがあるが、十折の三味線は100年以上も前に作られなくなり、現代では美術品と化してしまっている。しかし、この接合部の課題を現代の制作技術を用いて解決することができれば、過去の職人技のメリットを踏襲させ、より多くの人に三味線の魅力を伝える事ができるのではないかと考えた。

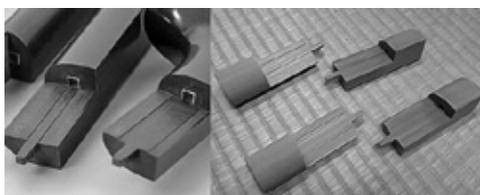


図2 ホゾと仮継ぎ

4. 新しいジョイントと内蔵フレッド

ジョイント部は、家具の製作に用いられる特殊なホゾ組み加工機を用いて制作することにした。様々なサンプルを作り、演奏に影響が無い安定性を実現している。また、三味線にはギターフレッドのような的確な音を鳴らす為のガイド機能はないが、棹の分割位置が一部の音を鳴らすポジションと一致している。しかし、棹の分割位置から割り出すことが出来る音は二箇所のみであり、残りの部位に関しては習得する中で覚えていかなければいけない。これが、初心者には習得難易度が高い楽器のような印象を与えてしまい、三味線の敷居を高くしている。そこで、これまでの十折の三味線では、棹を均等に分割しているが故に分割位置とポジションが一致していなかったが、本研究では弦を押さえるポジションに合わせて不均一に分割することで、内蔵型のフレッドを制作することにした。加えて、誰しもが直感的に三味線を組み立てられるように棹の断面には印をつけ、同じ印同士を連結させていくことで簡単に組み立てる事ができる(図3)。

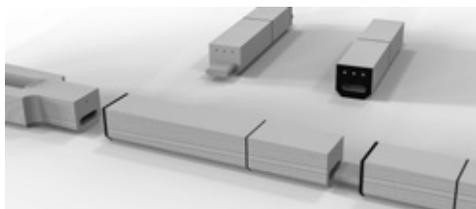


図3 新しいジョイントと内蔵フレッド

パーツを胴内部に収納した際、胴の中でパーツ同士がぶつかり合わないよう、隙間を無くすことで動かないように設計している。また、それぞれの収納段にはスペーサーを挟み、細かなパーツには収納袋を用意した(図4)。

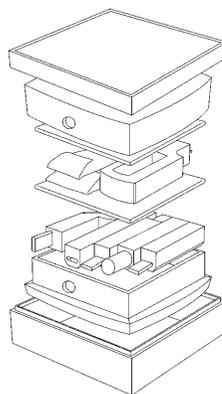


図4 収納図

音響膜には破れないメンテナンスフリーな素材として強靱なアラミド繊維を使用し、楽器としての音色にも追及している。動物の皮革を取って使用しないことで、抵抗感なく受け入れられる楽器となった。

